〔好色一代男七〕差す盃は百二十里

亭主が仕懸此にかぎらず、盃、間鍋、吸物椀まで瞿麥の散紋、氣の附たる事ぞかし、

〔風流曲三味線四〕元服しても子供心

主人は此子が酒に痛むと見乍ら、客への馳走なれば、宵から見事に飯りましたがお暇乞とあれば、爰は一つかえと燗鍋取て、八分目斟げば、是非に及ばず、目を塞ひでぐつと飲み、○略下

〔鶉衣前篇上〕摺鉢傳

さらでも住うき傍輩の中に、はしたなき間鍋の口さし出、杓子の曲り心より、うき名は立そめ、○略下

〔數寄道具定直段附〕釜師清右衛門

原曳好糸目間鍋鐵蓋添箱入　拾五匁　利休形四方間鍋塗蓋添箱入　銀四兩

〔數寄道具定直段附後篇〕塗師宗哲

塗間鍋　三拾八匁　同挽物木地　四拾三匁　同丸間鍋同　拾五匁

〔堀川後度狂歌集一春〕元日　有難亭御代住

かん鍋のふたみが浦の初日の出とその袋の色かとぞ見る

〔書言字考節用集七器財〕銚釐今世温酒器

〔倭訓栞前編十五〕ちろり　酒器にいふは、三餘贅筆に急須と見えたり、ちら〳〵を俗にちろ〳〵ともいへり、燗に急なるをもて名とする也、○略中今酎瓶と稱する者、内に火を入る鐵炮あつて、酒のさめざるやうに制したる器也、

〔皇都午睡三編上〕京と大坂と一夜の船の隔あるにさへ、大坂の温ひは京で暖ひ、○略中京のちろりを湯婆、○略下

ちろり